視角

家族での子どもをめぐる関係を考える

加藤美帆

「レンタル家族」にみる家族

「仲良し」というと子ども同士がまずは浮かぶが、近ごろは親子や夫婦など家族の関係を表すこともしばしばある。そこで子どもをめぐる家族の仲について、最近「紀子の食卓」（二〇〇四年　園子温監督）という映画を見て思ったことから書き始めたい。

物語は、ある海辺の町に両親と妹と平穏に暮らしていた十七歳の紀子が、停電の起こった夜に東京へと家出するところから始まる。紀子はインターネットサイトで知り合った「上野54」ことクミコの仲介で、レンタル家族の仕事にかかわり始める。依頼者である老女の家に行き「久しぶりだね、おばあちゃん」と笑いかけたり、また時には中年男性の家に行き、娘として「お父さん」と呼びかけ一緒に食卓を囲む――これが紀子のレンタル家族としての仕事である。一方で紀子の出て行った後、残された家族は徐々に均衡を崩していく。妹も姉と同様に家出し、悲嘆した母親は自ら命を絶ってしまう。そして父は、仕事を辞めて娘たちを捜し始める。

平穏で仲の良い家族の一員として暮らしながら、徐々に虚無感を抱えていった紀子だが、そこから逃れた後、お金を払うことによってでも家族の関係を得たい人々のために虚構の家族を演じ続ける。これはあくまで映画のストーリーなのだが、ここで浮かび上がってくるのは、家族の仲の良さが本物か偽物かということではなく、「家族」のもつ引力のような力が人を縛る力ではないだろうか。

浮かび上がる親子の関係

数年前に、子どもの不登校がきっかけで自分の生き方を考え直したという母親たちに、インタビューをしたことがある。場所は喫茶店などさまざまだっ

たが、レコーダーを間に置いて話を聞く時間の中で、子どもの不登校から、夫や自分の親との価値観の対立が浮かび上がったこと、それまで信じていたことやあたりまえだと思っていたことに疑問を感じるようになったことが、少しずつ語られていった。それまで夫を立てる妻としてしか生きられなかった、夫や義理の親の意見に従ってばかりだった――でも、子どもの不登校についての意見の食い違いの中でそれに気がつくことできた、といったように。そこに至るまではそれぞれに長い紆余曲折があり、中にはそれまでの生活を大きく変えることになったという人もあった。その過程には直接語られた以上の困難が推し量れたが、そう語る姿は、既存の価値観や社会のあり方を問い直し、個人としての声を上げ始めた女性たちのように思えた。

しかし、それが子どもとの関係になると、穏やかだが強い口調で、子どもを本当に理解できるのは自分だけだと思う、自分は何があっても子どもを守るつもり、といった言葉が多くの母親たちから出された。それまで縛られてきた学校・会社中心の価値観や不均衡な夫婦関係を相対化しながら同時に、強い輪郭を浮かび上がらせる子どもとの絆。家族関係への問い直しと再構築の中で、むしろ揺るぎない実体として親子関係が再確認されたかのようだった。親子の仲の良さはそれほど絶対的なのだろうか――インタビューで話を聞きながら、この語りのコントラストに、何かざらつきのような違和感が感じられた。近代家族の終焉（えん）、新たな家族像の模索が言われるようになってずいぶん年月は経った。家族の相対性が確認され、権威的な親子関係はもはや遺物のように言われ始めてもいる。その一方で、家族メンバー間の情緒的な密着した関係性――仲の良さへの志向性はむしろ強まっているのかもしれない。しかし、その関係性はかつて個人を束縛していた家族関係から人々を解放するものなのだろうか。

ペアレントクラシー社会の中で

家族には、社会の不平等の構造や矛盾も現れてい

るのだが、そういった側面は親密な関係という前提ゆえに、なかなか見えにくい。それに加えて、少し俯瞰(ふかん)してみると、現代の家族の多くが、親子のつながりが濃密化せざるを得ない状況に置かれているようでもある。

昨今、家庭の経済力と学力・学歴との関連性が明らかになるにつれて、ペアレントクラシーという言葉を耳にする機会も増えた。ペアレントクラシーとは、あえて訳せば能力主義ならぬ「親主義」とでも言おうか。もともとは教育政策の新自由主義的な傾向が強まる一九九〇年代のイギリスで、教育社会学者のブラウン(P. Brown)が用い始めた言葉である。市場主義が教育政策に導入されるにつれて、より良い教育をわが子に受けさせたいと考える親たちは、進学実績のある学校や特色のある学校に子どもを行かせるため、地域をまたいだり、私立学校を選ぶような、教育の「選択」を盛んに行うようになる。つまり親の経済力や熱意が、子どもの学力への直接的な影響力をもつことになる。より有利な選択を可能にするようなさまざまな資本の有無が、教育達成を左右するようになる、という構図だ。

ただし、ペアレントクラシーの意味するところはそれだけではない。そうした社会においては、親たちは子どもへの教育責任をより強く抱え込み、子どもの教育へと熱意や資金を、いっそう注がざるを得なくなる。確かに、マスコミが家庭の収入や教育への投資の差と子どもの学力や学歴との相関を書き立てるほど、子どもをもつ親たちは、子どもへの「愛情」は、お金や手間といった見える形で示すものとして行動せざるを得なくなる。会話の量や一緒に見るテレビ番組など日常生活の過ごし方も子どもの学力の高低に結び付くとなると、気の休まる暇もないだろう。買い与えるサービス、モノ、余暇の過ごし方までもが子どもの「能力」に還元されるなら、それらに投資していくことが愛情を示すこととなってしまう。また、社会の先行きの不透明さや競争主義の高まりは、子どもを育てる親たちにはいっそう強く不安として実感されよう。そうした不安も、教育

への投資を駆り立てる装置として機能する。つまり、ペアレントクラシー社会とは、親の教育投資を煽り続けながら、同時に社会的格差と教育達成の相関を強めていくという循環関係を示している。そう考えると、子どもに時間と手間とお金を惜しまず、常に愛情深い親たちというのは、そうしたサイクルのジレンマの中に入り込み、抜け出せない苦しさも抱えているのかもしれない。現代の社会において、どの家族が勝ち組というわけではなく、いずれの家族もその内側に社会のひずみや矛盾を取り込まざるを得ない状況に置かれているのではないか。

子どもとの仲の良さ、再考

冒頭に挙げた、「紀子の食卓」という映画のラストは、家族の形を取り戻そうとして失敗した父親と、そして姉も置いて、早朝の誰もいない街に紀子の妹が出て行くところで終わる。親たちが家族のつながりを取り戻そうと躍起になる中、紀子の妹はそこから身を引き抜き、朝もやの中、外の街へと踏み出していく。この映画の展開の中で、唯一どこか光の感じられるシーンである。家族とは、その性質から、どこか不安定な危うさをもつものなのだが、そこに少しでも確かさを与えようともがく大人を尻目に、子どもは家族に対して別の像を見いだしているのかもしれない。そういえば、不登校の子どもをもつ母親たちが、子どもを守ろうと決意を固める一方で、不登校を経験している十代のある子どもが「お母さんは自分の生き方を見つけてほしい」と語っていたことも印象的だった。

今の時代、何かにつけて親子の関係に親密さが求められるように感じることが多くある。しかしもしかしたら大人たち自身が、親子の親密な関係に自らを埋め込み、お互いを抜け出せなくしているのではないだろうか。親子の仲の良さも少し距離を置いて考えてみる必要があるのかもしれない。

（お茶の水女子大学）